

学 会 録 事

1. 2004年度日本藻類学会第3回持ち回り評議員会報告

平成16年12月3日から11日の期間に第3回持ち回り評議員会開催し、下記の案件について審議した。

1) 日本学術会議会員候補者推薦および情報提供について

本年日本学術会議法の一部が改正されて、第19期(今期)までの登録学術研究団体から推薦する方式を改め、今後は日本学術会議が自ら会員候補者を選考する方式(co-optation)へと制度が改正された(「藻類」52巻2号133頁参照)。今回の制度改正後の会員候補者選考に関しては、日本学術会議に設置された「日本学術会議会員候補者選考委員会」が学術研究団体等から広く会員候補者情報を収集し、選考することとなり、「日本学術会議会員候補者に関する情報提供について」という依頼が各学会協に送られた。日本藻類学会には「地方在住者の数」を3名以上、「産業人・実務家、若手研究者、女性研究者の合計」を「3名以上」とし、そのうち「女性研究者の数」は1名以上という条件で、6名以内の日本学術会議会員候補者の推薦とその科学者(学術会議会員候補者)の情報提供が求められた。この求めに応じ、評議員に項目ごとに適任者を推薦してもらい、その結果を集計し、それぞれ上位3名を日本藻類学会の候補者として推薦することを提案し、了承された。

2) 科研費申請に際しての学会名使用許諾に関して

独立法人製品評価技術基盤機構、宮道慎二氏より、「微生物の世界」と題する写真集をシリーズで刊行する計画があり、その助成を受けるため科学研究費に応募する際に監修として日本藻類学会の名称を借用したい旨の依頼があり、学会としては実質的な負担がなく、学会会員の教育・研究にも少なからず貢献すべき活動と判断し、時間的な制約もあり、会長の責任で名称使用を許諾した。この件についての事後承諾を提案し、承認された。

2. 2004年度日本藻類学会第4回持ち回り評議員会報告

平成16年12月14日から17日の期間に第4回持ち回り評議員会開催し、下記の案件について審議した。

1) 日本学術会議会員候補者の推薦および情報提供について

第3回持ち回り評議員会における投票の結果、産業人の項目以外では候補者が絞れきれなかったため、第3回持ち回り評議員会の結果を踏まえて、若手および女性については各2名の候補者を、その他の候補者については7名の候補者を挙げて、各項目ごとに再度選挙を行った。その結果、1) 若手研究者として藤田大介氏、2) 女性研究者として長里千香子氏、3) 産業人として新井章吾氏、4) その他の候補者として大野正夫、川井浩史、原慶明の3氏を選出し、各候補者に情報提供を依頼するとともに、提供された情報を事務局が一括して日本学術会議に送付した。

2) 第8回マリンバイオテクノロジー学会大会開催の協賛について

マリンバイオテクノロジー学会事務局より第8回大会開催

の協賛と雑誌「藻類」への開催要領掲載の依頼があり、審議の結果、承認された。

3. 秋期シンポジウムの開催

2004年度日本藻類学会秋期シンポジウム「海藻産業の海外事情—現状と展望—」が、日本海藻協会と日本応用藻類学研究会との共催で、2004年11月26日午後1時より、東京・日本橋のロイヤル・パークホテルにおいて開催された。演題と講演者(所属)は次の通りである。

1. 最近の寒天産業について—新規寒天・用途・原料事情—: 井上修(伊那食品工業株式会社)、2. カラギナン—原料海藻と世界の市場の現状—: 唐川 敦(三晶株式会社中央研究所)、3. アルギン酸の原料事情—チリ沿岸の資源調査と中国の実情—: 笠原文善(株式会社キミカ)、4. 海外のワカメ産業の現状と課題: 佐藤純一(理研食品株式会社)、5. 海苔業界の現況: 日本・韓国・中国: 石渡誠(全国海苔貝類漁業協同組合連合会)。

シンポジウムには、海藻業界の多くの分野から約150名の参加があり、活発な討議がなされた。また、シンポジウム後に開かれた懇親会には70名が出席し、和やかな中で積極的に情報や意見の交換が行われた。

4. 日本分類学会連合

第4回総会およびシンポジウム(平成17年1月8日: 国立科学博物館新宿分館)が開催された。

[主な報告事項]

1) 第3回シンポジウムの開催。2) 宣伝イベント「なん種類の生物が日本にいるか知っていますか?—日本分類学会連合ブックフェア」の開催。3) ニュースレター5~6号の発行。4) ホームページ: ニュースレターPDF版・WEB版公開, 分類群情報ページ, 研究者データベースの作成。5) 日本産生物種数調査: 既存データの更新。未完成の分類群についての調査の継続。6) タイプ標本データベース(下記URLにデータベースを公開中, <http://foj.c.u.tokyo.ac.jp/jtypes>): 平成16年度科学研究費補助金が採択され, 新たなデータを追加。7) メーリングリスト: 2005年1月8日現在のTAXAの登録者数(678名)の報告。8) 第3回シンポジウムの内容の出版(「生物科学」の移入種特集号として)。

[主な審議事項]

1) 2004年度決算と監査: 収入1,245,185円, 次年度繰越金996,675円, 支出248,510円。2) 2005年度事業計画: 第5回シンポジウム「ミドリムシは動物?それとも植物?: 原生生物の不思議な世界」(仮題)。3) ニュースレター7号, 8号の刊行。4) ホームページ: ニュースレターの公開, 分類群情報のページの稼働。5) 日本産生物種数調査: 調査の継続, データの更新の受付。6) 日本タイプ標本データベース: 平成17年度科学研究費補助金が採択された場合, 新規データの追加

を進める。7) 分類学者データベースの公開。8) メーリングリスト：昨年と同様に活動を行う。9) 2005年度予算案の承認と加盟学会分担金の徴収(1万円/学会)。10) 会則第9条の改正。

[シンポジウム]

種の違いをどのように見分けるか—生物を種の違いで見よう—「連合代表あいさつ」松浦啓一(科博)、「爬虫類の種—ヘビとトカゲの見分け方」疋田努(京大)、「昆虫の種を見分ける方法—いくつかのアリ共生型昆虫とアリを例に」丸山宗利(科博)、「分子系統からみた褐藻コンブ類の多様性と種」川井浩史(神戸大)、「自然界に生きるカビの種を探る」出川洋介(神奈川県博)、「巨樹バオバブを分類する」湯浅浩史

(進化生物学研究所)・「生きている化石、ウミユリの分類—どの形質が重要か?」大路樹生(東大)

5. 日本藻類学会 2005-2006 年度評議員の変更について

日本藻類学会 2005-2006 年度評議員選挙の結果、中部地区からは前川行幸氏、石田健一郎氏、倉島彰氏の3名が選出された(藻類 53 巻 3 号 182 頁参照)。しかしながら、石田氏が昨年度に引き続き庶務幹事(海外担当)を担当することから、附則第3条に照らし合わせ、石田氏には評議員を辞退していただいた。これに伴い、評議員選挙の結果中部地区で次点であった大城香氏に評議員を依頼し、承諾を得た。

学会・シンポジウム情報

第1回北西太平洋地域における赤潮/HABに関する国際ワークショップの開催概要(案)

(The First International Workshop on HAB in the Northwest Pacific Region)

1. 会議名：第1回北西太平洋地域における赤潮/HABに関する国際ワークショップ

(The First International Workshop on HAB in the Northwest Pacific Region)

2. 会議の目的

NOWPAP 関係諸国(日本、中国、韓国、ロシア)の専門家が一堂に会して、NOWPAP 地域(日本海及び黄海)における赤潮/HABの現状、モニタリングやその結果の解析・評価手法に関する最新情報の交換を行う。また、NOWPAP 地域における関係機関のネットワークを構築する。

3. 開催時期

2005年6月30日(木)～7月1日(金)

4. 開催地

富山県富山市タワー 111 スカイホール

施設連絡先

〒930-0856

富山市牛島新町5番5号

TEL: 076-432-1414

FAX: 076-431-5698

URL: <http://www.intec.co.jp/tower111/>

5. 開催機関等

(1) 主催

(財)環日本海環境協力センター

(2) 共催(予定)

IOC/WESTPAC、東京大学アジア生物資源環境研究センター、(社)日本水産学会

(3) 後援(予定)

富山県、環境省、NOWPAP/RCU

6. プログラム

テーマ：北西太平洋における赤潮/HABに関する取組み
(Suggested Activities for HAB in the Northwest Pacific Region)

セッション1：北西太平洋地域またはそれに関連する海域の赤潮/HABの発生状況について

セッション2：北西太平洋地域における赤潮/HABに関する観測について

セッション3：北西太平洋地域における赤潮/HABの原因種について

セッション4：北西太平洋地域における赤潮/HABへの対策及び緩和技術について

ポスターセッション

7. 使用言語

英語

8. 連絡先(事務局)

〒930-0856

富山県富山市牛島新町5-5

(財)環日本海環境協力センター

TEL: 076-445-1571

FAX: 076-445-1581

URL: <http://www.npec.or.jp/>

第4回日本応用藻類学研究会総会・春季シンポジウム 「アマモ類の多様性と漁業・自然環境の保全と再生」

日時：2005年6月25日(土曜日)、場所：東京海洋大学

企画の趣旨

アマモ類の多くは比較的静穏な浅海の砂泥域に群落を形成し、各種の形態や生育環境にはそれぞれ類似性が認められる。海草の祖先植物は陸上の種子植物から分化したものであるが、異なるいくつかの分類群から進化したことが知られている。海草には、アマモ類をはじめ、世界に56種ほど知られるが、日本沿岸には、そのうちの約16種が生育し、種や遺伝的多様性の高い重要な海域とされている。アマモ類は、海藻とは異なり、海底の砂泥質中に伸びる地下茎や根を持ち、地下部からの栄養塩類の吸収と海水中に直立する葉によって光合成を行う。また、陸上の顕花植物と同様に、種子と地下茎の栄養繁殖によって沿岸域に群落を広げる。アマモ類の群落はアマモ場と呼ばれ、沿岸の基礎生産者として生態系に果たす役割は大きい。昔から、魚介類の産卵場や幼稚仔の棲息場、摂餌場として知られており、漁業資源の生産にとって重要な役割や機能を持つ群落、即ち、「藻場」の一つとして高く評価されている。しかし、高度経済成長期以降、日本の沿岸域では、埋立てや離岸堤の建設、河川改良などの人工的改変によって物理的、化学的環境が変化し、直接または間接的な影響によってアマモ場も急激に減少した。昨今、種類によっては、絶滅危惧種に含められるものも現われてきた。このような状況下を背景として、沿岸域の自然環境や漁業環境の保全、維持、管理などの観点から、アマモ類の移植や人為的な造成が行われるようになってきたが、これらの行為にもいくつかの問題が危惧され、自然再生事業や環境保全のあり方の難しさが現われて

いる。そこで、本シンポジウムでは、アマモ類の一般的な認識として、種やその分布、生育環境、利用の歴史を踏まえ、種や系統の分子的特性や藻場としての特徴を知るとともに、アマモ場の保全や造成、管理のための具体的な取り組みのあり方や方向性について論議することを目的として企画した。

参加費（講演要旨代を含む）：

事前申込者：日本応用藻類学会会員 1,000円(当日2,000円)、非会員 3,000円(当日4,000円)

講演要旨代：1,000円(講演要旨のみの請求の場合)

弁当代：1,000円(土曜日は大学生協の食堂は閉店のため、希望者に予約販売)

懇親会費：3,000円(シンポジウム終了後、東京海洋大学大学生協食堂で開催)

申し込み・問い合わせ先：

参加申込先および弁当・懇親会申込先(6月10日締め切り)
〒108-8477東京都港区港南4-5-7 東京海洋大学応用藻類学研究室

藤田大介(日本応用藻類学研究会幹事) E-mail: d-fujita@s.kaiyodai.ac.jp, Tel & Fax: 03-5463-0537

参加希望者は弁当・懇親会の有無も含め、メールでご連絡下さい。参加費等は当日会場にて徴収。

問い合わせ先：東京海洋大学応用藻類学研究室

主催責任者：能登谷 正浩(日本応用藻類学研究会会長)
TEL: 03-5463-0532 FAX: 03-5463-0688

お詫びと訂正

藻類52巻3号の裏表紙目次において、学会録事、会員移動のページが実際と異なっております。お詫びして訂正致します。正しくは以下の通りです。

	誤	正
学会録事・「地球環境研究総合推進費」17年度新規研究課題の公募について	183	182
会員異動	184	183

編集後記

毎年の事ながら、どうして年度末はこんなに忙しいのだろう。会議の連続、博論、修論、卒論、報告書、お客さん、来年度の計画書、引き続いての学会。まあ、これで給料を頂いているのだから仕方ないとはいえ、忙しすぎる。あと何年続く事やら。こんな事を考えるのは定年が近づいた年寄りの考える事だと誰かに言われた。そういえば、私もあと・・・年。いつのまにか両手で数えられるまでになってしまった。ちょっと寂しい気もするが、忙しい内が花だと慰めてくれる人もいる。